

放課後等デイサービスにおける SST の効果に関する研究 2

ASD 男子における 1 年間の症状と行動問題の変化についての検討

○荒牧 要右*1 小國 真由子*1 堂 周平*1 中嶋 麻美*1 藤井 茉衣子*1 安原 昭博*2

(*1 YCC ども教育研究所 *2 安原どもクリニック)

KEY WORDS: 放課後等デイサービス SST 行動問題

目的

YCC ども教育研究所では、児童福祉法に基づく通所支援事業「放課後等デイサービス」を用いて、ASD (自閉スペクトラム症) をはじめとした発達障がいとそれらの傾向を持つ子どもを対象とした SST (ソーシャルスキルトレーニング) を行っている。本発表では、当所における SST が ASD を持つ子どもの症状と行動問題に及ぼす変化について、ADHD 児用に開発された不注意や多動・衝動に関する尺度を用いて検討した。

方法

対象: X 年 4 月～X+1 年 3 月までに行われた SST に参加し、専門医により ASD と診断され、発達検査にて FSIQ が 70 以上である小学 1 年～中学 3 年の男児を持つ母親 25 名 (小 1～小 3: 5 名、小 4～小 6: 7 名、中学生: 12 名)。SST に参加しているメンバーは ASD を持つ子どもだけではなく ADHD や LD を持つ子どもも一緒に参加していた。子どもはすべて訓練前から継続的に投薬治療を受けていた。なお本研究は安原どもクリニック倫理委員会の承認を得ている。

プログラム: 毎週 1 回の頻度で 1 年間実施した。1 回あたりの時間は、子どもの状態に合わせて 90 分 (前後半 40 分、休憩時間 10 分) または 50 分、1 クラス 3～7 名と設定した。スタッフは発達障がいの子どもの保護者の支援の経験を持つ臨床心理士ら 3～4 名が担当した。なお、クラスは決められた子どもとスタッフで行い、変更はなかった。

本 SST は、好ましい社会的行動を体験的に学んでいくことを目的とした。例えば、チーム対抗でゲームを行うことで競争場面を作り、集団で楽しく活動するためには、感情を抑えることや相手の気持ちを考えること、適切な行動を伝えてそれを実践させるなどを行った。活動内容は、一人一人の子どもの参加意欲を高めるため、予めスケジュールを決めるのではなく、毎回子どもの様子を見て次の活動内容を検討した。(Table. 1)

また、9 月と 3 月に担当スタッフが保護者との面談を行い、家庭と SST における子どもの様子について情報を共有し、意見交換と具体的な相談や助言を行った。

Table 1 SST 活動の例

1 回	SST の説明	自己紹介ワーク	スポーツ
2～4 回	古今東西ゲーム	カードゲーム	スポーツ
5～8 回	自己主張訓練	協力ボードゲーム	スポーツ

分析: SST 開始時と終了時に、母親に対して ADHD RS-IV-J と AD/HD 児用に開発された親評価衝動性尺度 (以下、ADHD-IRS) を行い、結果を比較した。

ADHD RS-IV-J は、DuPaul らによって開発された ADHD 評価スケールを山崎らが日本語に訳して作成したものであり、不注意の行動 9 項目、多動・衝動性の行動 9 項目、それらの合計 18 項目を「ない、もしくはほとんどない: 0」から「非常にしばしばある: 3」の 4 段階で評価する。

ADHD-IRS (2003 荒牧) は 16 項目からなる質問紙であり、「全くなし: 0」「少しある: 1」「かなりある: 2」「非常にある: 3」の 4 段階で評価する。多変量分散分析により「I (衝動性) - 情動」「I-注意」「I-発話」「不注意」の 4 因子が確認されている。「I-情動」は、主として怒り、攻撃な

どの情動が要因となる衝動性因子である (例: 自分の要求が満たされないとき、反射的に手が (口が) 出る)。「I-注意」は、注意に問題があることによって引き起こされる衝動性因子である (例: 色々な物に目がいつってしまうために、真っ直ぐに家に帰れない)。「I-発話」は、衝動的なしゃべりに関連する衝動性因子である (例: 相手のことを考えずに、過度にしゃべったり、早口になったりする)。最後の「不注意」は、うっかりミスといった認知のトラブルによる不注意であり、行動抑制や衝動性とは関連が低い因子である (例: あらかじめ用意した物でも、出かけにうっかり忘れてきてしまう)。

結果と考察

ASD 群 (N=25) の SST の活動前と活動後に評価した ADHD RS-IV-J と ADHD-IRS の被験者平均得点を Fig. 1 に示した。

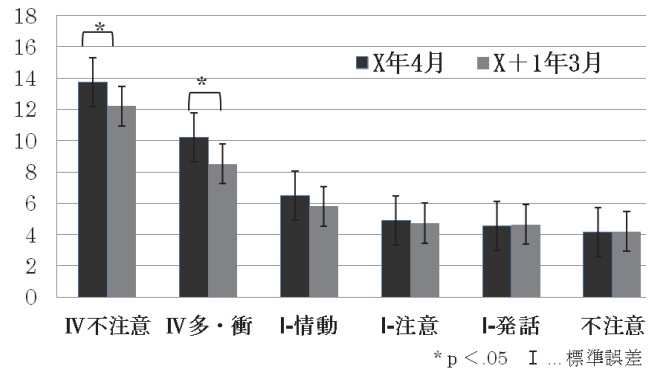


Fig.1 SST前後のADHD RS-IVとADHD-IRSの平均得点

ADHD RS-IV-J と ADHD-IRS の各項目について同被験者間で SST 開始時と終了時の間で t 検定 (両側) を行った結果、SST 開始時と比べて終了時の方が有意に問題ない方へ得点が推移した項目は、ADHD RS-IV においては「不注意」(p < .05) と「多動・衝動性」(p < .05)、ADHD-IRS においてはいずれも有意差は認められなかった。

また、ADHD-IRS を年齢別に検討したところ、小 1～小 3 群 (N=5) では、「I-発話」(p < .05) と「不注意」(p < .05) に有意に問題がある方へ得点が推移した。小 4～小 6 群 (N=8) では「I-注意」(両側検定 p < .05) にのみ有意に問題のない方へ得点が推移した。中 1～中 3 群 (N=12) ではいずれの項目にも有意差は認められなかった。

以上の結果から、当所における SST は、ASD 男子の不注意と多動・衝動性の問題を軽減することに一定の効果があると考えられた。特に小 4～小 6 群において、行動抑制に関係する注意の改善に効果がある可能性が示唆された。一方、小 1～小 3 群の発話と不注意においては問題が増加する結果となった。

参考文献

荒牧要右・安原昭博 (2010) AD/HD 男児と PDD 男児における衝動性の検討 日本特殊教育学会第 48 回大会発表
 荒牧要右・堂周平・安原昭博 (2016) 放課後等デイサービスにおける SST の効果に関する研究 1 日本特殊教育学会第 54 回大会発表 (ARAMAKI Y. OGUNI M. DOU S. NAKAJIMA M. FUJII M. YASUHARA A.)